

学童期における気になる子どもの実態 —東日本大震災から10年後の調査—

柴田 理 瑛^{1,2}
足立 智 昭¹
平野 幹 雄^{1,3}

本研究では、放課後児童クラブにおいて放課後児童支援員が児童についても「気になる子ども」という印象について、災害後中長期における、気になる子どもの行動チェックリスト (Behavioral Scale for Difficult Child after Disasters: BSDCD) (柴田・平野・西浦・足立、2019) を用いた調査を行った。その結果、保育士を対象とした先行研究では衝動性、多動性、共感性、愛着不全性、生活リズム不安定性の5因子であった因子構造が、衝動性、生活リズム不安定性、愛着不全性の3因子となった。回答者に発達特性 (気になる/気にならない) を尋ね、BSDCD尺度得点とその下位尺度得点、性別、学年を説明変数とする二項ロジスティック回帰分析を行ったところ、BSDCD尺度、衝動性尺度、愛着不全性尺度に有意なオッズ比が認められた。以上の結果は、東日本大震災後、中長期に現れた学童期の気になる子どもという印象について、特に衝動性と愛着不全性といった要因が強く関連していることを示唆するものであった。

Keywords : 東日本大震災、気になる子ども、放課後児童クラブ、衝動性、愛着、生活リズム

目的

本邦において、気になる子どもという用語が使われ始めたのは1980年代である。平井 (1981) は、「気になる子どもを保育者にとって、保育がしづらい子、あるいは問題児として捉えられている子ども」と定義している。また、本郷・高橋・平川・角張・飯島・杉村 (2004) によれば、気になる子どもとは、「顕著な知的遅れがなく、専門機関において何らかの障害をもつと判定されているわけでもなく、他児とのトラブルが多い、落ち着きがない、状況の変化にうまく対応できない、ルール違反をすることが多いなどといった特徴をもつ子ども」、としている。刑部 (1998) は、保育士が気になる子どもの様子について、「設定保育に入ろうとしているのにあの子だけが来ない、ちょっと見てない隙に友達とトラブルをおこして泣いて

いる」、といったエピソードを示している。

このような特性をもつ子どもを、国外では、difficult childと呼んでいる。Thomas and Chess (1989) が提案した気質スタイルによると、difficult childは、睡眠や食事のスケジュールといった生活リズムが不規則で、新しい人や状況を受け入れたりすることが難しく、欲求不満で癇癪を起こしやすいとしている。また、Tchimtchoua Tamo (2020) は、difficult childを、両親が自己の子どもの行動の特性を扱う上で、困難と感じる程度としている。

関連して、Matějček, Dytrych, and Schüller (1978) は、出生が望まれなかった子どもと母親について、出生が望まれなかった子どもが9歳の時点において、対照群よりも、欲求不満状況への反応が適切でなく、教師や母親に興奮しやすいと評定されやすい一方で、対照群に比べて家庭生活や文化的水準、知能には差がないことを示している。このように、気になる子どもは、特定の障害に関する診断を受けているとは限らず、保育者に、

1. 宮城学院女子大学発達科学研究所
2. 東北福祉大学
3. 東北学院大学

感情表現や対人関係を中心に行動上の問題があると認識され、保育が困難である子どもを指す。

保育の難しさは、Matějček et al. (1978) の示すように、保育者の子どもに対する認知の歪みに起因しうる場合や、子どもの気質や障害の有無など実際の育て難さに起因する場合もある。また、このような保育の難しさを、どちらかの要因に還元するのではなく、子どもと保育者を取り巻く全体から捉えるべきとする考えもある（若山、2017）。

本邦では、気になる子どもの増加傾向が報告されている。本間（2012）は、保育経験10年以上の保育者を対象とした質問紙調査を実施し、10年前と比較して保育の質が悪くなった要因、現在の保育の質について不安に思う要因において、いずれも気になる子どもの増加が第1の要因として挙げられることを示している。

同様に、小林（2015）は、全国の保育所にどの程度の障害児や気になる子どもなどの特別な配慮を要する児童が入所しているか、障害児の受け入れ体制や支援状況、保育における課題などを明らかにするために、全国の認可保育所約2,400施設について、質問紙調査を行った。その結果、回答のあった保育所のおよそ90%以上に気になる子どもが在籍しているという実態を報告している。この結果は、現在も多くの保育士が、気になる子どもの対応について困難を感じていることを示唆する。

一般的に、気になる子どもと一括りにされる傾向もあるが、池田・郷間・川崎・山崎・武藤・尾川・永井・牛尾（2007）は、保育士を対象とした質問紙調査の自由記述から、気になる子どもの呈する問題を、言語、行動、社会、情緒、他児とのトラブル、生活習慣、常同行動に関する7領域に分類した。この結果は、気になる子どもという保育士の印象が、複数の要因によって構成されること、支援を計画する際には、個別かつ領域ごとにアセスメントする必要があることを示唆している。

これまで筆者らは、東日本大震災後およそ10年にわたって、保育所の巡回相談や心理教育に関

する研修を中心としたアウトリーチを行ってきた。巡回相談や研修では、池田他（2007）が示すような言語、社会性、情緒といった領域に関する支援だけでは改善しないことも多く、他児を叩くなど衝動的で、担当保育士を一日中独占するといったアタッチメント（愛着）の未熟さに起因すると考えられる事例が共通に観察された。多くの保育士や放課後児童支援員が、東日本大震災以前と比べてそうした特徴をもつ子どもが増えたという認識をもっていた。

このような実践の積み重ねから、著者らは、災害後に見られる気になる子どもの様相は、先行研究の示すものと質的に異なるのではないかと考えた。また、注意が必要であることとして、巡回相談等において関わる子どもは、そのほとんどが東日本大震災後に出生しているということが挙げられる。そのゆえ、気になる子どもが増加したという印象が、東日本大震災の揺れや津波等による直接の影響であるとは考えにくく、東日本大震災を直接経験していない子どもが、保育者に気になる子どもという印象を持たれやすくなってしまおうのかについて検討する必要がある。

Rodríguez-Soto, Buxó, Morou-Bermudez, Pérez-Edgar, Ocasio-Quñones, Surillo-González, and Martínez (2021) は、子どもにとって潜在的な心的外傷体験による、出生前の母親のストレスと子どもの気質の関係について、複数の先行研究を体系的にレビューしている。子どもにとって潜在的な心的外傷体験とは、出生前に母親が災害関連のストレスを受けている、出生前に母親がパートナーから家庭内暴力を受けているなどの出来事に対する曝露経験である。Rodríguez-Soto et al. (2021) によると、出生前に母親が心的外傷を体験した場合に、出生後子どもに否定的な感情表出が増加し、肯定的な感情表出が減少することを指摘している。

Tchimtchoua Tamo (2020) は、COVID-19のパンデミックによる自宅待機中の母親のストレスと、母親の子どもに対する印象について調査を実施している。その結果、母親は自宅待機以前に比べて、

自宅待機期間中に多くのストレスや不安を抱え、子どもへの対応が難しくなったと感じるようになったことを示している。また、自宅待機期間中には、実際に子どもが以前よりも多くの問題行動を表出し、そのことが母親のストレス状態を顕著に予測することを合わせて報告している。

これらの先行研究より、災害を直接経験しなくとも、出生前の母親の被災や家庭内暴力といった心的外傷体験、災害等によって一定期間著しく行動が制限されるなどの場合に、保育者のストレスが高まり（2次的ストレス：Goenjian, Walling, Steinberg, Karayan, Najarian, & Pynoos, 2005）、子どもの感情表出や行動に否定的な影響が生じるものと考えられる。

しかしながら、災害後中長期にわたって観察される気になる子どもという印象は、どのような要因によって構成されているかについては、ほとんど検討されていない。

そこで柴田他（2019）は、保育者がもつ東日本大震災後の気になる子どもという印象構造を明らかにすべく、宮城県内の保育士を対象として、災害後に見られる気になる子どもの行動尺度（Behavioral Scale for Difficult Child after Disasters: BSDCD）の作成を試みた。因子分析の結果、衝動性、多動性、共感性、愛着不全性、生活リズム不安定性の5因子が抽出され、保育所に在籍する乳幼児期の気になる子どもといった印象は、これらの下位尺度が複合して形成されることが示唆された。

一方で、災害後中長期にわたって観察される気になる子どもという印象は、乳幼児期にだけ生じる印象ではない。著者らの放課後児童クラブ（以下、児童クラブ）におけるアウトリーチでは、他児を叩く、放課後児童支援員を独占したがるといった、災害後に保育所で観察される気になる子どもの特徴と、ほぼ同様の傾向が各児童クラブで共通して観察・報告されてきた。

本研究では、保育士を対象として作成されたBSDCDを、放課後児童支援員を対象として新たに実施することで、災害後に観察される学童期の

気になる子どもの特徴を明らかにすることを目的とした。

方法

対象 宮城県内の放課後児童支援員を対象とし、BSDCDへの回答を求めた。回答を後日郵送するようお願いしたところ、全体で155名分の児童に対する回答が得られ、結果の分析に用いた。調査時期は、2020年11月から2020年12月までであった。

尺度構成 回答者は、自身が気になる子／気にならない子と認識している児童を1人ずつ想起し、BSDCDの各項目について「全く見られない」から「かなり見られる」の10段階で評定を行った。先行研究では、衝動性、多動性、共感性、愛着不全性、生活リズム不安定性の5因子が抽出されたものの、生活リズム不安定性は2項目となっており、独立した因子として扱うには不十分であるため、新たに項目を追加した。その他、回答者の基本属性として勤務地、児童クラブ名、在所児の人数構成、想定する児童の学年と性別を記入した（男児：87名、女児：67名、小学校1年生43名、小学校2年生47名、小学校3年生31名、小学校4年生22名、小学校5年生10名、小学6年生2名）小学校4年生以上の対象児が少なかったため、以降の分析では小学校1年生から3年生を下級生、小学校4年生から6年生を上級生として分類した（表1）。

表1 学年ごとの対象児数と気になる子の数及び割合

学年	人数 (名) (a)	割合 (%)	気になる子 (名) (b)	割合 (%)	割合 (%) (b/a)
1年	43	27.70	26	34.21	60.47
2年	47	30.30	29	38.16	61.70
3年	31	20.00	17	22.37	54.84
4年	22	14.20	14	18.42	63.64
5年	10	6.50	7	9.21	70.00
6年	2	1.30	0	0.00	0.00
合計	155	100.00	76	100.00	49.03
下級生	121	78	72		
上級生	34	22	21		

倫理的配慮 宮城県内の放課後児童クラブを訪問し、調査への協力について口頭で了承が得られた(計14箇所)。各児童クラブには、筆者らのうち1名が訪問し、口頭にて調査の目的や記入方法を改めて説明した。調査への回答は強制ではなく任意であること、回答したくない場合には、たとえ回答の途中であっても回答の拒否ができること、個人情報情報は厳密に保護され、得られた回答は、統計的に処理され学会や論文誌において発表されることが説明された。

結果

因子分析 BSDCDが学童期の子どもにおいても、乳幼児期の子どもと同様の因子構造をもつか確認するため、SPSS ver.26を用いて因子分析を行った(主因子法、プロマックス回転)。155名中54名において欠損値が見られたので、欠損値を平均値で置き換えた。その結果、衝動性、生活リズム不安定性、愛着不全性の3因子が抽出された(表2:累積寄与率60.60%)。第一因子は、「他の子どもに暴言を吐く」、「突然キレル」、「我慢ができな

表2 BSDCD尺度の因子分析

	衝動性 ($\alpha=.98$)	生活リズム不安定性 ($\alpha=.94$)	愛着不全性 ($\alpha=.89$)	共通性
Q37	0.97	0.07	-0.19	0.84
Q39	0.95	0.07	-0.24	0.77
Q40	0.91	-0.07	0.03	0.81
Q31	0.91	0.08	-0.11	0.80
Q36	0.89	0.05	-0.19	0.70
Q10	0.88	0.01	-0.03	0.76
Q23	0.88	0.05	0.01	0.82
Q15	0.88	0.09	-0.19	0.70
Q25	0.86	-0.10	0.03	0.70
Q35	0.85	-0.02	0.03	0.73
Q45	0.84	0.15	-0.25	0.66
Q24	0.83	-0.09	0.11	0.74
Q17	0.80	-0.04	0.22	0.82
Q30	0.78	-0.09	0.26	0.82
Q26	0.75	-0.05	0.06	0.58
Q3	0.66	0.10	0.15	0.64
Q6	0.66	-0.05	0.09	0.47
Q14	0.66	-0.11	0.30	0.64
Q27	0.62	0.13	-0.02	0.45
Q34	0.61	0.00	0.38	0.75
Q7	0.58	0.04	-0.07	0.32
Q38	0.45	-0.05	0.27	0.37
Q46	0.07	0.87	-0.03	0.79
Q9	0.09	0.85	-0.08	0.75
Q43	-0.05	0.85	0.00	0.69
Q41	0.00	0.84	-0.06	0.67
Q42	0.08	0.81	0.02	0.73
Q1	0.00	0.79	0.03	0.64
Q12	0.10	0.70	-0.01	0.55
Q8	0.04	0.67	-0.04	0.46
Q5	0.00	0.63	0.19	0.51
Q4	0.22	0.51	0.11	0.47
Q13	-0.06	0.44	0.20	0.26
Q19	-0.16	0.42	0.41	0.36
Q21	-0.10	0.41	0.26	0.26
Q22	0.00	0.02	0.85	0.74
Q2	-0.16	0.18	0.78	0.62
Q16	-0.07	0.12	0.76	0.60
Q29	0.02	-0.08	0.66	0.41
Q20	-0.06	-0.02	0.64	0.37
Q11	0.35	-0.05	0.61	0.67
Q33	0.44	-0.09	0.54	0.67
Q28	0.13	0.07	0.45	0.31
Q44	-0.26	0.32	0.42	0.26

い」、「怒りっぽい」、「他の子どもを蹴る」、といった項目について高い負荷を示したことから衝動性因子と命名した。第二因子は、「夜寝る時間がばらばらである」、「朝起きる時間がばらばらである」、「生活のリズムが乱れている」、「夜ごはんが遅い」、「夜寝るのが遅い」、といった項目について高い負荷を示したことから、生活リズム不安定性因子と命名した。

第三因子は、「職員に甘える」、「職員のそばにばかりいる」、「職員と個別の関わりを求める」、「1人で遊んでいる」、「言葉が少ない」、といった項目について高い負荷を示したことから、愛着不全性因子と命名した。表3に因子間相関を示す。各因子の α 係数は、衝動性因子で $\alpha=.97$ 、生活リズム不安定性因子で $\alpha=.94$ 、愛着不全性因子で $\alpha=.89$ 、尺度全体で $\alpha=.97$ となり、高い信頼性を有することが示された。

表3 BSDCD尺度の下位因子間相関

因子	1	2	3
1 衝動性		.41	.50
2 生活リズム不安定性			.35
3 愛着不全性			

BSDCD尺度の妥当性に関する検討 因子分析で抽出したBSDCD尺度44項目の平均値を求め、BSDCD尺度得点とした。学年（小学校1から3年生：下級生／上級生：小学校4から6年生）、性別（男児／女児）、BSDCD尺度得点を説明変数とし、発達特性（気になる／気にならない）を目的変数とした二項ロジスティック回帰分析を行った（変数増加法：尤度比）。以降分析では、欠損値を除いた102名の回答が分析に用いられた。

HosmerとLemeshowの検定を行ったところ、表3に示されるモデルは適合することが示された ($\chi^2(8)=12.27, p=.14$)。

同様に、モデル係数オムニバス検定の結果、表4のモデルは有意であった ($\chi^2(8)=80.46, p<.001$)。表4より、BSDCD尺度得点のオッズ比は6.44 ($3.14 \leq CI \leq 13.20$) となった ($p<.001$)。

表4 BSDCD尺度得点を説明変数とした二項ロジスティック回帰分析

	発達特性	下限	上限
BSCCD	6.44**	3.14	13.20
N	102		
適合度検定 (H-L検定)	$\chi^2=12.27$ $p=.14$		

下位尺度の妥当性に関する検討 因子分析で抽出したBSDCD尺度の下位尺度ごとに平均値を求め、下位尺度得点とした。学年（下級生／上級生）、性別（男児／女児）、衝動性尺度得点、生活リズム不安定性尺度得点、愛着不全性尺度得点を説明変数に、発達特性（気になる／気にならない）を目的変数とした二項ロジスティック回帰分析を行った（変数増加法：尤度比）。

HosmerとLemeshowの検定を行ったところ、表5に示されるモデルは適合することが示された ($\chi^2(8)=4.03, p=.85$)。同様に、モデル係数オムニバス検定の結果、表5のモデルは有意であることが示された ($\chi^2(8)=87.65, p<.001$)。表5より、衝動性のオッズ比は3.25 ($1.64 \leq CI \leq 6.41$) で、愛着不全性のオッズ比は2.07 ($1.15 \leq CI \leq 3.72$) となった (いずれも $p<.001$)。

表5 BSDCD尺度の下位尺度得点を説明変数とした二項ロジスティック回帰分析

	発達特性	下限	上限
衝動性	3.25**	1.64	6.41
愛着不全性	2.07**	1.15	3.72
N	102		
適合度検定 (H-L検定)	$\chi^2=4.03$ $p=.85$		

考察

BSDCD尺度の因子分析について 本研究では、災害後中長期にわたって観察される学童期の気になる子どもの特徴を明らかにすることを目的として、放課後児童支援員を対象に、BSDCD尺度を用いた調査を行った。因子分析の結果、BSDCD尺度は、衝動性、生活リズム不安定性、愛着不全性の3因子構造になることが示された。

保育士を対象とした柴田他 (2019) の調査によると、BSDCD尺度は、衝動性、多動性、共感性、

愛着不全性、生活リズム不安定性の5因子構造となることが示されている。一方本研究の結果は、BSDCD尺度が衝動性、生活リズム不安定性、愛着不全性の3因子構造を示した。柴田他（2019）において示された共感性や多動性という因子は、保育者に想定される子ども側の発達によって、他の因子に収束する可能性がある。

災害後、幼児から思春期の子どもの生活リズムに関する調査として、Usami et al. (2013) は、東日本大震災から8か月後に調査を行っている。その結果、子どもの睡眠時間と心的外傷後ストレス症状には低い相関を示し、家屋の損壊や避難所経験のある子どもにおいてのみ、睡眠時間が短くなることを示している。

さらに、Usami et al. (2014) は、東日本大震災から8か月後よりも20か月後において、幼児以外で心的外傷後ストレス症状が改善すること、8か月後と20か月後の両時点において、朝食を摂取した子どもが、朝食を摂取しなかった子どもよりも、心的外傷後ストレス症状が低減することなどを示している。

また、災害後の子どもの衝動性に関する調査として、オランダのエステヘンデ花火倉庫爆発から5年間、学童期および思春期の子どもを対象とした追跡調査の結果は、被災した子どもが、被災しなかった対照群の子どもよりも、不注意や多動、癩癩など行動上の問題や、身体的問題を報告する傾向が強かったことを示している (Boer, Smit, Morren, Roorda, & Yzermans, 2009)。

災害後の子どもの愛着に関する調査として、2001年インド西部地震や、2002年宗教暴動といった災害から4、5年後に、学童期および思春期の子どもの愛着スタイルを調査した研究がある。調査の結果、対照群に比べて、地震による被災を経験した子どもは、愛着対象との親密な関わりを避けるといった、拒絶・回避型の愛着スタイルが多く、暴動による被災を経験した子どもでは、愛着対象との親密な関わりを求めつつも抵抗を示す、両価型の愛着スタイルが多くなることを示している (Kumar, & Fonagy, 2012)。これらの先行研究

から、衝動性、生活リズム不安定性、愛着不全性の3因子は、発達段階によらず、災害後中長期に観察される子どもの特徴として、内容的妥当性が高いといえよう。

ロジスティック回帰分析について 学年、性別、BSDCD尺度得点、衝動性尺度得点、生活リズム不安定性尺度得点、愛着不全性尺度得点を説明変数とし、発達特性を目的変数とした二項ロジスティック回帰分析を行った。その結果、BSDCD尺度得点のオッズ比は6.44、衝動性尺度得点のオッズ比は3.25、愛着不全性尺度得点のオッズ比は2.07を示し、それぞれ強く発達特性と関連した。

この結果は、BSDCD尺度得点、衝動性尺度得点、愛着不全性尺度得点が1点増えると、放課後児童支援員にとって気になる子どもと判断されやすくなることを示唆し、尺度全体および下位尺度である衝動性と愛着不全性は、十分な弁別的妥当性を有するものと考えられる。東日本大震災後、中長期に現れた学童期の気になる子どもという印象は、特に衝動性と愛着不全性といった要因が強く関連していることを示唆する。

丸山（2014）は、学童保育指導員を対象として、気になる子どもに関する質問紙調査を行っている。その結果、気になる子どもの特徴として、宿題をすることが困難であること、暴力や暴言をふるうこと、著しく落ち着きがないこと、他児とのトラブルが多いこと、ルールを逸脱すること、指示や連絡が伝わりにくいこと、1人で過ごしがちであること、過剰に大人との関わりを求めることを報告している。

放課後児童支援員は、対象児が、暴言を吐いたり他児を蹴ったりするとなど衝動性が高く、職員に甘え、職員のそばにばかりいるなど、主たる保育者との間の愛着形成に課題があると判断されると、気になる子どもとして判断しやすいという本研究の結果は、丸山（2014）の研究結果を支持するものであった。

Usami et al. (2014) は、朝食の非摂取が災害と関連した心的外傷後ストレス症状を生じさせるの

ではなく、津波被害後の保育環境の悪化を反映しうることを指摘している。また、丸山（2014）の調査対象と、本研究の対象に想定された子どもは、いずれも災害を直接経験しているわけではない。

これらから、衝動性、生活リズム不安定性、愛着不全性の3因子は、子どもの発達段階や、災害後中長期に特異的な気になる子どもの特徴であるというよりも、災害を含めた、子どもの保育環境が一定水準悪化した場合に広く観察される気になる子どもの特徴であることが示唆される。今後、災害経験の比較的少ない地域や発達段階の異なる子どもを対象として同様の調査を行い、比較検討を行う必要がある。

保護者・保育支援への応用可能性について

木曾（2011）は、気になる子どもの保護者との関係の中で現れる保育士の困り感に着目し、保育士に半構造化面接を行っている。その結果、保育士は、気になる子どものために、保護者にその実態を理解してほしいという思いをもつものの、保護者の意見と対立すると、保育士は、保護者に合わせて働きかけるようになる、という変容過程を指摘している。

さらに、保育士が保護者に合わせるように働きかけるようになったとしても、気になる子どもの実態を保護者にわかってほしいという思いと、保護者に合わせるという思いの間で葛藤することを指摘している。

同様に、本郷他（2004）は、気になる子どもの保護者と保護者支援について、保育士を対象に調査し、保護者が自分の子どもを気になる子どもであると認めている場合には、積極的な保護者支援が行われているものの、保護者が子どもの状態を認めることについて拒否的である場合には、保育士にとって保護者支援が困難であることを示しており、気になる子どもの保護者支援について、その重要性を示唆している。

このような保育者の葛藤や保護者支援の重要性は、児童クラブにおいても生じるものと考えられる。特に、気になる子どもの姿を保護者には見え

ずに、児童クラブでのみ見せる場合もある。このように、目に見えない現象について議論する場合には、数値で示すことが有用であると考えられる。BSDCD尺度を用いることで、学童期の子どもの実態を数値化し、適切な支援計画を立て、その成長を保護者と共有するために応用することが期待できる。

課題 本調査では、BSDCD尺度の下位尺度である、生活リズム不安定性尺度のうち、「朝起きるのが遅い」「朝来る時間がばらばらである」といった朝のエピソードに関する項目を中心に、空欄回答が目立った。また、下位尺度の妥当性を検討するために行った二項ロジスティック回帰分析では、生活リズム不安定性尺度得点のオッズ比が有意ではなかった。児童クラブは、児童が放課後に利用する施設であり、放課後児童支援員が児童の朝の様子を把握することは難しく、回答が困難であった可能性がある。生活リズム不安定性尺度については、表面的妥当性が低いことが考えられるため、生活リズム不安定性尺度については再検討が必要である。

引用文献

- Boer, F., Smit, C., Morren, M., Roorda, J., & Yzermans, J. (2009). Impact of a technological disaster on young children: A five-year postdisaster multiinformant study. *Journal of Traumatic Stress: Official Publication of The International Society for Traumatic Stress Studies*, 22(6), 516-524.
- Felix, E., Rubens, S., & Hambrick, E. (2020). The relationship between physical and mental health outcomes in children exposed to disasters. *Current psychiatry reports*, 22, 1-7.
- 刑部育子 (1998). 「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析. *発達心理学研究*, 9(1), 1-11.
- 平井信義 (1981). 気になる子どもたち—幼児の精神衛生と保育— フレーベル館
- 本郷一夫・高橋千枝・平川昌宏・角張慶子・飯島典子・

- 杉村僚子 (2004). 「気になる」子どもの保護者支援に関する調査研究. 教育ネットワーク研究室年報, 4, 1-15.
- 本間英治 (2012). 保育の質に関する保育士の意識の実態—A市内における保育士へのアンケート調査を通して—. 保育学研究, 50(2), 192-201.
- 池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子・尾川瑞季・永井利三郎・牛尾禮子 (2007). 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究. 小児保健研究, 66(6), 815-820.
- 木曾陽子 (2011). 「気になる子ども」の保護者との関係における保育士の困り感の変容プロセス. 保育学研究, 49(2), 200-211.
- 小林芳文 (2015). いわゆる「気になる子ども」や障害児等の受入や支援に関する保育所の現状と実態 (アンケート・ヒアリング調査の結果から), 保育所における障害児やいわゆる「気になる子」等の受入れ実態, 障害児保育等のその支援の内容, 居宅訪問型保育の利用実態に関する調査研究報告書, 社会福祉法人日本保育協会, 109-120
- Kumar, M., & Fonagy, P. (2012). Conceptualizing attachment trauma: Exploring emotional vulnerabilities among disaster affected children of Gujarat. *Psychological Studies*, 57(1), 9-21.
- Matějček, Z., Dytrych, Z., & Schüller, V. (1978). The Prague study of children born from unwanted pregnancies. *International Journal of Mental Health*, 7(3-4), 63-77.
- 丸山啓史 (2014). 学童保育における「気になる子ども」の実態と課題. 教育実践研究紀要, 14, 79-88.
- Goenjian, A. K., Walling, D., Steinberg, A. M., Karayan, I., Najarian, L. M., & Pynoos, R. (2005). A prospective study of posttraumatic stress and depressive reactions among treated and untreated adolescents 5 years after a catastrophic disaster. *American Journal of Psychiatry*, 162(12), 2302-2308.
- Rodríguez-Soto, N. C., Buxó, C. J., Morou-Bermudez, E., Pérez-Edgar, K., Ocasio-Quinones, I. T., Surillo-González, M. B., & Martínez, K. G. (2021). The impact of prenatal maternal stress due to potentially traumatic events on child temperament: A systematic review. *Developmental psychobiology*, 63(7), e22195.
- 柴田理瑛・平野幹雄・西浦和樹・足立智昭 (2019). 東日本大震災の長期的影響と今求められる支援者支援：一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センター2018年度活動報告. 宮城学院女子大学発達科学研究, 19, 8-16.
- Tchintchoua Tamo, A. R. (2020). An analysis of mother stress before and during COVID-19 pandemic: The case of China. *Health Care for Women International*, 41(11-12), 1349-1362.
- Thomas, A., & Chess, S. (1989). Temperament and personality. In G. A. Kohnstamm, & J. E. Bates, & M. K. Rothbart (Eds.), *Temperament in childhood* (pp. 249-261). *John Wiley & Sons*
- Usami, M., Iwaware, Y., Kodaira, M., Watanabe, K., Aoki, M., Katsumi, C., ... & Saito, K. (2013). Sleep duration among children 8 months after the 2011 Japan earthquake and tsunami. *PLoS One*, 8(5), e65398.
- Usami, M., Iwaware, Y., Watanabe, K., Kodaira, M., Ushijima, H., Tanaka, T., ... & Saito, K. (2014). Analysis of changes in traumatic symptoms and daily life activity of children affected by the 2011 Japan earthquake and tsunami over time. *PLoS One*, 9(2), e88885.
- 若山飛鳥 (2017). 「気になる」子ども研究の展開—1982年から2016年まで—. 教育学研究論集, 12, 57-62.
- 謝辞 この研究は、JSPS 科研費 19K03261 の助成を受けて実施された。